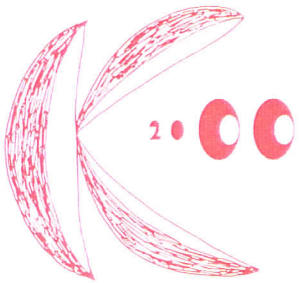


創像新世紀



THE 23RD JAPAN INTER-DESIGN FORUM
2000
KYOTO

← JIDE → Towards the Century of Creative Imagination

古来、人間は想像の力によって自分の生きる世界を捉え、その世界を超える別の世界をさ思い描いて、それへの希求を自らの生きる証としてきた。想像の力は、自然や人事の現実の経験によって養われ、それによって制約されながらも、なお常にその現実を超えて働くことによって多彩な創造をうながしてきたのである。

「ヴィジョンなきところ、民滅ぶ」(旧約聖書/箴言29章)
(Where there is no vision, the people perish.—Old Testament, Proverbs29)
「冥冥に視、無声に聴く」(荘子)
(We see in the depth of darkness, and hear where no voice speaks.—Chuang Tzu)
「物の見えたるひかり いまだ心にきえざる中にいひとむべし」(芭蕉/赤冊子)
(Before the gleam of insight fades from the heart, put it into poetry.—Basho)

と、さまざまな時代に、さまざまな民族によって、この想像の力、あるいはヴィジョンの力の働きたたとその意味が語られてきた。

想像はまさに創造であり、これによって神話も、詩歌も、宗教も、造形芸術も一つまり人間の人間であるゆえんのもは生みだされてきたと言ってよい。

だが、20世紀と21世紀の境目に立ついま、私たちは人間の根源の力としてのこのCreative Imaginationの衰えを日々感じないではいけない。

19世紀以来、20世紀を通じて、科学と技術と産業の発展はめざましく、人々にまさにユートピアの幸福を夢みさせもした。

だがそれは同時に、幸福の不均衡と、民族やイデオロギーの対立と、戦争と集団虐殺と、地球規模の環境破壊とをもたらした、むごたらしい一世紀でもあった。

現在進行中といわれる「情報化」も「globalization」もこの大いなる幻滅(disillusion)から私たちを立ち直らせてくれるとはどうい思われない。

しかし、それゆえにこそ、いま私たちは創造の力としての想像力、「創像力」の力つよいよみがえりを求めずにはいけない。

21世紀に向けてのその再生の契機をつくる場として、この日本の古都京都ほどふさわしい場所は他にめったにない。

自然と人間、旧と新、東と西、保守と変革とが折り重なり、せめぎあって共生するこの都市は、紫式部や和泉式部、法然や明恵や親鸞以来、一休や世阿弥や利休以来、また光悦や宗達や蕉村以来、芸術と宗教における「創像の力」がもっとも力つよく豊かに、連続として働きつづけ、そのまま世界の普遍的文化の一つの中心となっている地である。

「第23回日本文化デザイン会議2000京都」に課せられた使命は重い。これを私たちの「創像力」の起死回生の場としよう。

第23回日本文化デザイン会議2000京都 議長 一芳賀 徹

【会場】京都府京都市 国立京都国際会館・京都芸術センター他 【テーマ】創像新世紀 【主催】日本文化デザインフォーラム 世話役人 平安団1200年記念協会
「後援」文化庁・国際交流基金 日本青年会議所 全日本広告連盟 【議長】芳賀 徹 【副議長】安藤忠雄 伊佐政和 中村宗信 田口昌男 【実行委員】伊東祐一
松本正志 大塚洋一 長谷川 高橋 藤 山本 正 深井 晃子 松岡正博 米山俊直 【特別協賛】キヤノン 販売 安田火災 【協賛】サカイダイ
サービス 東映 日本郵政 日本航空 京セラ 京都府観光局 京都銀行 京都信用金庫 京都電力 池田印刷 高見 宝飾造 成安社 日本航空
ニッポン 花見酒造 福徳製菓 京同機機 コーニャ コーロール 賛助 日本印刷 大日本印刷 博吉社 東北新報 西販印刷 芳村(株) スルヤヤ 協賛「0000」
「創像力」を「文化デザイン」の会議は、これまでにならぬ国際的コミュニティを志向し、「文化の春刊」(1980年から東方甲斐郡で出版され、第23回目の号に京都市会館のイ
ンターフェイスの「建築・文学・美術・音楽・映像・哲学・言語」を「時々の分野の第一線で活躍する約100名の講師が一室に集い、シンポジウム 講演 パワーポイント プレゼンテーション
を披露する)、多岐にわたる交流の場を日ごとに、同時進行で私的的に繰り広げます。参加費は自由にプログラムを組み合わせ参加し、講師と一対多となった貴重な「同時代性」を体験する
こと。「動物をデザインする」との「次なる創造をデザインする」ことです。今回もまた、講師とともに熱い視点のもとで交流し、その成果を次なる世代に向けて発信して参ります